

軍事史学

第52巻 第4号

巻頭言

戦争と作戦・戦闘

終戦から七十余年を経過し、あの戦争当時指導的な立場にあった方々は既に亡く、戦争の経験者から直接その体験を伺う機会すら少なくなつた。

大東亜戦争についての研究も、当時の重要人物から当時の秘話を聞きだしスクープするという段階から、今後は基本的な史料から考察していく段階に入ったものと考えられる。

戦史という言葉は、大は作戦・戦闘のみならず外交・政治・経済まで含んだ「戦争史」と言うべきものから、小部隊の戦闘史までの幅がある。

大東亜戦争を研究するための基本的文献としては防衛庁が編纂した、いわゆる公刊戦史は基本的文献であることは間違いないが、これが「戦争史」とかと言うと疑問が残る。公刊戦史は「開戦経緯シリーズ」七巻で軍事と外交の関係を、「大本営シリーズ」一七巻で軍中央部の統帥を、「軍戦備シリーズ」一三巻で軍備の維持建設を記述し、残り六五巻が各方面毎に「進攻作戦」「ソロモン、ニューギニア」「中部太平洋」「南西方面」「ビルマ」等一一地域別に陸軍(陸軍航空)、海軍毎に編纂されている作戦史である。

この編纂要領は明治憲法の下で軍事については、陸軍の「参謀本部」と海軍の「軍令部」の二元統帥となつていたことから生じたものである。「戦争」の全体像を理解するためには陸、海双方の資料を合わせて読み込むとともに、更に政治・外交、経済・産業・資源等の各方面から考察することが必要となる。

クラウゼヴィッツは『戦争論』において「戦争の基本的な要素とは、二者間の闘争即ち決闘である。戦争とは畢竟するに決闘の拡大されたものに他ならない」と言い、また「戦闘の集積が作戦であり、作戦の累積が戦争である」と言っている。また帝国陸軍は、作戦要務令の綱領において「軍ノ主トスル所ハ戦闘ナリ故ニ百事皆戦闘ヲモツテ基準トスベシ」と述べている。しかしながら戦闘の原則が即ち戦争指導の原則とはなり得ないものであり、「戦争」を理解するためには政治・外交、経済・産業・資源等更に広い分野の検討が必要である。

とはいえ戦闘は戦争の基礎的事項であり、これを無視して戦争を論ずることはできない。戦後七〇年、日本は戦闘を交えることなく平和を享受した結果、直接の戦闘経験者は極めて少ない状態となり、これを他国の経験から学ぶ必要はなくなつた。また、戦闘のスペクトラムも、テロ、ゲリラ等の不正規戦闘から通常兵器による戦闘、極限としては相互にICBMを用いる全地球的な核戦争まで拡大している。

壮大な安全保障論、核戦略論においても「戦闘」の実相と離れた議論は、基礎のない建物と同じで「砂上の楼閣」の危うさを感じるものである。

(大東信祐)